



帰国する寿里先生（キト空港にて）

エクアドルは南米大陸にありながら、中米の風土に似たお国柄をもつ国である。この国の名が日本に届いたのは、黄熱病の駆除で赴任した野口英世博士の活躍によるところが大きい。

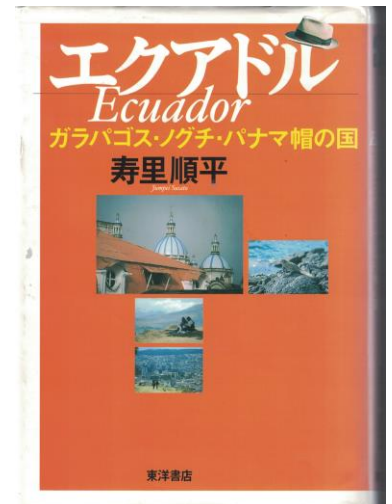
今から40年も昔、私は太平洋に面するこの国の商港グアヤキルに上陸した。滞在中に現地の一医学生と親しくなった。昨年になって、やり残した宿題を思い出した。「尋ね人」である。これが最後のチャンスと思い立ち、ホテルの電話帳をめくった。しかし40年の空白は埋まらない。なにせグアヤキルの人口は首都のキトを超えて210万の大都市になっている。さらに手がかりといえばネバレスという姓と、彼が医師だということだけだ。

電話帳には奇跡的にも、この苗字の欄が十数行しかなかった。一軒ずつに「ネバレスという医師を捜しています」をくり返した。日本でそんな電話をかけたなら、すぐに切られてしまうだろう。人情の機微を実感したのは、この時だった。「同姓の医師の記事を新聞で読んだ」「亡くなっているが遺族がいるはず」と言ってくれる人がいた。こうして私は一時間足らずで連絡先を入手でき、遺族からも電話がかかってきた。40年もの経過を超えて、彼らはまだ私のフルネームを覚えていてくれた。私は尋ね人の名前すらおぼろげだった自分を恥じ、隣人愛と家族の絆の強さに感じ入った。

私が探していた（すでに他界）彼の名は、アロンソ・ネバレスといった。初めて出会ったころ、アロンソはまだ医学生だった。大学の講義で「日本人は蛋白源に魚介類をとるから寄生虫病の博物館だと教授が言っていた」などと、日本への関心ぶり（？）を披瀝したのを覚えている。小学生の妹が「それなら今日は、魚はやめて鶏のソテーを作るわ」と言って、あつと言う間に生きた鶏の羽をむしって料理を始めたのには驚いた。母親が、小学生ならそれくらいの手伝いは当たり前だと言った。母親は、私のワイシャツのカラーが傷んでいるのを見て、すぐに裏表を付け替えてくれた。彼女はミシンを自在に操りながら、息子を医師にしたのである。アロンソはその後フランスに留学し、町でも著名な医師として活躍した。

そもそもアロンソが医師になろうと思ったのは、生まれつき股関節に障害のあった妹を治してやりたいという思いからだ。当時、彼が私にそう告げたことがある。そのアロンソは、母親が癌に侵された際、自らが執刀すると同時に、不眠不休の看護をした。母親が息を引き取った数日後に彼も母親のあとを追うように過労死した。

一部始終を聞いた私は「でも、ほんとうに充実した生涯でしたね」ともらした。妹のヨランダは黙ったまま頷いてみせた。



サタデー・トーク

バイブル・トーク

きき手 尾崎一夫 毎週土曜日放送		淀橋教会 峯野龍弘主管牧師 毎週日曜日放送	
11月03日	アンデス録音スケッチ：鉄砲づくりの村	11月04日	ニューヨーク現地報告：「国連孤児の日」について
11月10日	アンデス録音スケッチ：サン・ホセの村祭り	11月11日	聖書遊覧バス：旧約聖書 詩篇シリーズ
11月17日	アンデス録音スケッチ：サルセードの青空市場	11月18日	リスナーからの手紙紹介：「お便り交換の時間」
11月24日	アンデス録音スケッチ：帽子屋の店先にて	11月25日	聖書遊覧バス：旧約聖書 詩篇シリーズ

放送後の番組は、ホームページ(<http://japanese.reachbeyond.jp>)のトップページ左側メニューにある『インターネット放送』のリンクページからお聴きいただけます。(mp3形式)

放送時間：日本時間 午前7時半~8時 15410kHz (再放送) 午後8時~8時30分 15400kHz
(米国アリゾナ州制作/オーストラリア送信)

